

小論文試験問題

・解答上の注意

1. 問題文は3枚、解答用紙は1枚（表・裏）、下書き用紙は1枚です。
2. 解答用紙には、一橋大学の受験番号を記入し、氏名は記入しないでください。
3. 解答は横書きにしてください。
4. 解答用紙は、受験番号を記入する面が表になります。問1を表に、問2を裏に解答してください。
5. 解答用紙の追加、交換はしません。
6. 解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字の訂正のほかは使わないでください。
7. 問題の内容についての質問には、応じません。
8. 試験終了後、問題文と下書き用紙は、持ち帰ってください。

(平成18年11月25日実施)

小 論 文

問題文を読んで、次の問に答えなさい。

問1 問題文を要約しなさい。句読点も1文字と数え、600字以内とする。

問2 文中に登場する重要と思われる語（たとえば、ヴェーバー、スミス、近代知、価値自由、市場、公共性、道徳、宗教など）を素材として（選択する語は上記例示に限る必要はなく、また、一つでも複数でもよい）、自由に小論文を作成しなさい。選択した重要語を素材として論じるものならば、問題文そのものからは離れて論じるものでもよい。小論文には題名を付し、[キーワード]欄には、たとえば「近代知（5行目など）」というように、選択した語およびその語が登場する問題文の行数を記すこと。句読点も1文字と数え、1200字以内とする。

[問題文]

1 優れた社会学者については、その評価をめぐってさまざまに立場がわかれます。それは、その社会学者の提起した問題が単純なものではなく、奥行きが深いものであることを示す証拠といってよいでしょう。しかし、マックス・ヴェーバーのケースについてみると、事態は少し趣を異にしているように思われます。というのも、ヴェーバーをめぐる評価の分裂は、時には理解を絶するものがあって、これが同一人物について語った言葉かと疑われるほどだからです。

先まわりして言えば、それは、ヴェーバーが近代が産んだ社会学者であるにもかかわらず、近代知の限界点にすでに立っていた、という理由によるものでしょう。ヴェーバーは、どうやらあまりにも早く登場しすぎ、あまりにも時代に先行しすぎたのです。

10 ヴェーバー研究にたずさわる人間は、誰しも、自分自身が依って立つ根拠へと強制的に連れだされていると感じずにはいられません。一般に社会科学にかかわる者は、自分の知が何らかの偏見にもとづいているとは考えないのですが、ひとたびヴェーバーにつきあうや否や、客観的で公平だと考えていた自分の知が、実は特定の歴史的価値判断によって支えられているということ、あるいは無限に複雑な関係の上に成り立っている事態の一面的な単純化に他ならないこと、その意味であえて言えば、偏見によって根拠づけられているという事実を、否応なしに認めさせられることになります。ヴェーバーが論文『社会科学のおよび社会政策的認識の客観性』をはじめ、その他の学問論で述べたのは、そのような厄介な問題でした。ヴェーバーが一貫して学問論の中心にすえた「^{ヴァリエーション}価値自由」とは、このこととかかわっています。

20 しばしば誤解されてきたことですが、ヴェーバーの言う「価値自由」とは、社会科学にたずさわる人間は一切の価値判断にとらわれてはならず、ただひたすら客観的事実を追求すべきだ、といったものではありません。そのような純粋客観主義は、むしろヴェーバーが排撃してやまないものでした。彼が論じたのは、社会科学のいかなる命題も、根本的には何らかの価値判断を前提とせざるを得ないということ、そしてこの点をはっきり自覚している必要があるということでした。純粋に客観的な立場などというものは、およそ歴史や文化をその研究対象のうちに含む社会科学においては存在しえない。というのも、社会科学の営み自身が、特定の歴史的状況の内部におかれているからであり、特定の文化的時代環境の要請に対応するものだからである。——ヴェーバーの言う「価値自由」とは、だから、何よりもまず、社会科学の研究にたずさわる者は、自分の研究をなすにあたって、その研究がいかなる価値判断を前提とするものであるかについて明らかにしておく必要があるということ、この点にかかわっていたのです。

ある分析作業が特定の価値判断を根拠としているとするならば、たとえ同一の対象を扱っても、別の分析者が別の価値判断を前提とした場合、別種の像が構成されることは、大いにありえることでしょう。そして、この別種の像を虚偽だとして完全に排除することはできなくなります。ある特定の価値判断のみが唯一絶対とは言えないからです。社会学者が提示すること

30 のできる現実の像とは、対象についての唯一で確実な実態を示すというものではなく、現実のある側面を抽出してそれを純化した一種のユートピアなのであり、実は仮想のヴィジョンの提示であること——ヴェーバー自身の言葉を用いれば「理念型」の提示であること——を認めなければなりません。「理念型」としてあるほかない以上、社会科学が提供できる像は、確実な真理だと申し立てる資格をもたないのであって、本質的に相対的であるほかありません。「価値自由」とは、社会科学の営みがこのような「理念型」の提示であらねばならないことを認めたうえで、他の「理念型」の構成に対しても開かれた態度で接するということ、この点にかかわるものなのです。

こうしてヴェーバーの学問論によれば、現代における社会科学の使命は、ある歴史的対象について唯一の確定的な像を提供することにあるのではないことになります。判断の根拠として別の価値をもってきたとすれば、そこには、同じ対象についてまったくといってよいほど異なった像が描きだされることになるのです。とすると、ここに根源的と言わざるを得ない知の不確実性が生じることは否定できません。ヴェーバーの学問論は、そうした不確実性にたじろぐことなく、そこに生じる不安な状態に直面することをこそ、訴えるものでした。『職業としての学問』の中で、ヴェーバーは現代の知が「神々の闘争」と言うべき不確実性に直面していると述べたのですが、それはこのためだったのです。

40 しかし、近代に成立した社会科学は、一般に、このような不確実性を認めようとはせず、自然科学におけるニュートン力学をモデルとして、確実な知をもたらすものこそ、科学の名にふさわしいと主張してきました。これに対してヴェーバーは、このように硬直した近代知がすでにその生命を使い果たし、限界点に達してしまったことを見通していました。

ヴェーバーがすでに近代知の限界点に立っていたとするならば、彼の社会科学の中に、これまで常識として疑われることがなかった発想法を攪乱してしまう要素が孕まれていたとしても、驚くには当たりません。戦後西ドイツで初の大統領となった歴史学者テオドール・ホイスは、ヴェーバーについて感想を求められて、「この人物には、今日もなお、人々の頭を狂わせるものがある」と述べましたが、それはまさしく、当を得た指摘でしょう（E・バウムガルテン『マックス・ヴェーバー 人と業績』1964年）。この指摘をみて、ヴェーバーについて、常軌を逸した変人だったのではないかという印象を受けるかもしれませんが、そう受け取るべきではありません。そうではなく、ヴェーバーの作品に孕まれている「頭を狂わせる」部分にこそ、現代にふさわしい社会科学のあり方が示唆されているのではないかと考えてみる必要があります。

50 ホイスは、ヴェーバーの方法が「頭を狂わせる」のは、彼の分析が一切の感傷を排除しているからだとししました。けれども、科学とは元来、自己の個人的な感傷を排除し、客観的な事実を明らかにするものでしょう。そう問うと、ホイスの発言は、何を指しているのかよく分からなくなってしまう。ホイスは意味のないことを言ったのでしょうか。

ホイスが言わんとしたことを理解するためには、社会科学に大きく分けて二つの潮流があること、この点に注意することから始めねばなりません。というのも、ヴェーバーの社会科学は、一般に考えられている社会科学の潮流とは異なって、個人の意識の内側に入りこみ、この内面的な領域を積極的にとりあげようとするものだったからです。倫理や道徳や、さらには感情をも排除しないで分析の対象とするのがヴェーバーの方法でした。とすると、こうした主観の領域に積極的に立ち入りながら、しかも、その分析において一切の感傷を排除するとは、いったいいかなることを意味していたのでしょうか。ともあれ、社会科学の二つの潮流について整理してみることにします。

60 近代社会科学の出発点に位置する著作としては、まず、アダム・スミスの『国富論』（1776年）を取りあげるべきでしょう。

近代社会の経済生活は発達した社会的分業を基礎としていること、ここからスミスの議論は始まります。その社会的分業の発達にともなって、職業における専門分化が進行して、人々は生産物を市場で交換するようになります。

この市場メカニズムにおいては、価格という記号化した非人格的な指標によって財の社会的交換と配分が行われます。市場に登場する生産者・商人・消費者について観察してみると、本来彼らは一人一人、身分・職業的地位・思想・趣味などによって特徴づけられているはずですが、そうした社会的差異はすべて、市場メカニズムの特徴である徹底した非人格性・匿名性によって消し去られています。市場メカニズムの中で活動する経済人にとっては、価格のみが手がかりなのです。

70 彼らは、自己の生産した財がどれほどの社会的評価を受けるかについては、市場にもちこんで実際にそれが売れるまでは、知ることができません。ここでは、生産者・商人・消費者を事前に差異化していた社会的属性は意味を失っており、市場における価格づけという事後的な評価だけが意味をもちます。社会的交換を決定するのは、非人格的・匿名的な記号としての価格であって、それを制作した人の倫理・道徳でもなければ、趣味や教養でもないのです。

このように、この場に登場する人物はすべて、社会的属性を剥奪され、「自分自身の利得」を目指し、「生産物が最大の価値をもつように」行為するという単純な利己主義的動機のみにもとづいて行為します。スミスは、市場経済のこうした非人格性・匿名性こそが、行為者の主観を超え、それとは切り離されたところで働く客観的社会機構を作り上げるのだと主張しました。近代社会科学は、この客観的な社会機構の仕組みを観察することによって、さらには、そこに働く作用を法則として認識

することによって、初めて可能になる。そうスミスは言うのです。

このような観点に立つならば、利己心は決して非難されるべきものではありません。かえって、利己心という動機を隠蔽し、自分の活動を慈善事業とか愛国心といった美名によって飾りたてる事業家こそが、スミスの呵責ない批判を浴びることになります。

市場においては、社会的公共性への奉仕にかかわる道徳心は消え失せています。けれども、自己の利益を最大化しようと努力することを通して、人々は「見えざる手」の働きによって、結果として社会公共の利益に奉仕するのです。利己心に駆られて行為することは、社会の利益を増進しようとする道徳的動機と比べて決して社会的に価値が低いわけではありません。むしろ、「社会の利益を増進しようと思ひこんでいる場合よりも、自分自身の利益を追求するほうが、はるかに有効に社会の利益を増進する」。「社会のためにやるのだと称して商売をしている連中が、社会の福祉を真に増進したというような話は、いまだかつて聞いたことがない。」こうスミスは言います。

こうして近代社会科学は、人間の行為動機を利己心という単純なレヴェルへと一元化しました。この一元化こそは客観科学としての社会科学を成立させる条件だったのです。

マックス・ヴェーバーの方法を確かめるためには、まず、『世界宗教の経済倫理』から、有名な「^{アインライトゥング}序論」を取り出してみるのがよいでしょう。ヴェーバーの場合、認識の直接の対象となるのは、スミスとは違って、市場メカニズムが内包している客観的強制法則ではありません。というのも、市場メカニズムが生み出す客観的な社会的機能は、それ自体として自立しているものではないと考えられたからです。

ヴェーバーによれば、市場メカニズムは、その存立が可能になるための条件として、内面的な——つまり、倫理・道徳的な——動機づけが必要です。このようにヴェーバーの方法は、社会的行為の内面的動機づけに注目するものであり、そのために行為の理論と呼ばれています。また、行為を動機づけている文化的意味への共感と理解を中心に組み立てられていることから、理解社会学と呼ばれることもあります。しかし、だからといって、ヴェーバーは外面的な客観法則を無視していたわけではありません。むしろ問題の中心におかれていたのは、行為の内面的動機づけと外面的な客観法則との間の、複雑で時には逆説的でもある関連を解明するということ、これでした。大塚久雄教授がヴェーバーの方法を「複眼的」と呼んだのは、そのためです（『社会科学の方法』1966年）。

すでに見たように、スミスにおいては、倫理や道徳といった主観的動機が排除される場面であるからこそ、市場メカニズムが社会科学的認識を可能にする根拠となったのです。これに対してヴェーバーは、市場メカニズムについても、先ずは、その歴史的成立を可能にした主観的動機に注目しなければならないとしました。ヴェーバーの場合、宗教が人類に与えてきた魂のみとりがその考察の出発点となります。宗教は悩みをもつ多くの人々に救済をほどこしたのですが、そのことによって、一貫した行為動機——つまりは、倫理的・道徳的生活態度——が社会的に形成されたというのです。

ヴェーバーは、その際に決定的に重要であったのは、単に救済の理念が提示されただけにとどまらず、世界像が提示されたことであった、と述べています。「この救いの理念は、組織的かつ合理化された「世界像」とそれに対する態度を表現するものとなったとき、はじめて独自の意義を獲得するにいたった。」

宗教活動の中心を担った知識人たちは、民衆がこうむる筆舌につくし難い苦難について、その意味理解を可能にし、苦難が何のためにあるのか民衆に納得させるような壮大な世界像を造型しました。こうした世界像を通して、この世の生を無意味なものと感じさせる苦難にも、実は人間の側にはうかがい知ることのできない神の意志が働いているのだと告げたのです。

苦難そのもののうちに神の計り知れない配慮を読み取ることができる、というこの心理的転換を通して、人々は苦難に意味を見出すことができるようになりました。ほかならぬ苦難を背負わされているという生の現実こそが、来世において救済されるという確かな証拠に他ならないと信じることができるようになったのです。こうなると、いまや苦難は、人々の人格を解体してしまうような重荷ではなくなって、むしろ、神によって選ばれた民に与えられた共通の印へと意味転換します。苦難は、民衆にとって内面に誇りをもって生きてゆく支えとさえなったのです。こうしてこれらの世界像は、苦難を超えて一貫した倫理的生活を送るのに必要な内面的動機を、広く社会的に形成したのです。この脈絡について、ヴェーバーは次のような印象深い記述を残しています。

「人間の行為を直接に支配するものは、利害関心（物質的ならびに観念的）であって、理念ではない。しかし、「理念」によって作りだされた「世界像」は、きわめてしばしば^{オリエンテール}転轍器として軌道を決定し、そしてその軌道の上を利害のダイナミックスが人間の行為を押し進めてきたのである。」

〔問題文は、山之内靖『マックス・ヴェーバー入門』（岩波書店、1997年）から抜粋したものである。章題、小見出しなどは全て省略し、本文についても、省略したところがある。〕